

関西学院 千里国際中等部・高等部

新シリーズ「Authentic Opportunities 本物に触れる教育」 第12回

がんばれ日本！

・・・関西学院千里国際（SIS）の生徒たちの場合・・・

教頭 井藤 眞由美

3月11日（金）に東北地方を襲った巨大地震と津波、そしてその後の福島原発のトラブルで、亡くなられた方に心よりご冥福をお祈りいたしますとともに、被害を受けられた方、今も避難生活を余儀なくされている方々に謹んでお見舞い申し上げます。このINFOE記事をアメリカでご覧になっている方の中にも、ご家族やご親戚が東日本にお住まいで心配しておられる人もいらっしゃると思います。自分の国の惨状を海外の目線から見るといふことに、なんとも言えない苛立ちのようなものを感じられることもあると思います。（私自身も1995年の阪神淡路大震災の時に同じくアメリカにいましたのでその時の気持ちを思い出します。）

日本では、あの日以来それぞれが自分のできる支援について考えよう、という雰囲気が高まっています。ですから、この記事に書いていることは、決して、ほかの学校では見られない特別ユニークなこと、というわけではないと思いますが、関西学院千里国際（SIS）の生徒たちが今どんな風にどんな取り組みをしているかという目の前の動きをそのまま紹介させていただくことにしました。

その日、本校は春休み初日でした。激しくはないけれど異様な揺れが不気味で、図書館の本整理のボランティア作業をしていた生徒たちなど、少数ですが校内にいた生徒たちに声をかけ、グラウンドに避難して事実確認をしました。「東北で

大きな地震があったらいい」「東北の地震なのに大阪でこんなに揺れるなんて！」が第一の衝撃。その後校内に入ってテレビをつけ、どんどん入ってくる情報にまさに声を失いました。

その日の朝から徳島県での無人島キャンプに出かけていたグループは、津波警報を受け、帰阪を決定。島に渡って設営をただけで帰ってくるということになりました（設営したキャンプ道具は後日担当教員が撤去に!）。二日後に出発が予定されていた沖縄への修学旅行は、ギリギリまで実施か中止かを検討の結果、津波警報も解けて出発できました。生徒たちの中からは精神的に参加するのがつらいという相談もありましたが、とにかく行けるのだから予定通りの旅を実施し、帰ってからできることを考えよう、と話しました。

沖縄旅行も無事に終わっての春休み中、たくさんの生徒が連絡をくれました。途中で取りやめになった無人島キャンプのメンバーや沖縄旅行の参加者からの連絡が特に多かったです。「テレビなどで被害の酷さを目のあたりにし、じっとしていられない。何かできることはないのか。すぐにでも動き出したい。」と。具体的なアイデアを提案してくれる生徒もいれば、活動を広げるリーダー的仕事をしたいと考えている生徒もいる。そこでまずは支援活動の拠点となるセンターを作ることにしました。春休みが終わって早々にセンター発足。SISと、OIS（併設の大阪インターナショナルスクール）の中高生のための情報センターです。これ以降はセンターのメンバー6人（SIS3人とOIS3人）の生徒主導で動いています。では、センターの活動を紹介します。

センターの仕事その一：具体的なアイデアを持っている人たちの活動を承認しサポートしそれを学校中に宣伝すること
今、具体的に動いている活動は、卒業生のライブコンサートでの募金活動（済）、チャリティーTシャツ販売、チャリティーコンサート開催、ベルマーク運動、チャリティースポーツトーナメント、チャリティーベークセールなど。さらに大人が主導のものとして、耐久腕立て伏せレースや、24時間ランニングマシン耐久ラン、というものなどが5月の学園祭に向けて企画されています。これらの情報を、校内テレビ放送システムを使って宣伝しています。



Children's wishes for Japan のためにかばんを作っているOISの小学生たち